

〔論 文〕

ケベックにおける新世代文学とトランスミグランス

—「文化的寛容性」の議論と仏語憲章施行30年後の状況を背景に—

真 田 桂 子

はじめに

二十一世紀に入り、多元社会ケベックは次々と新しい局面に直面し、新たな共存のあり方とコスモポリタニズムの可能性を模索しようとしている。とりわけ注目すべきことは、2006年末から巻き起こった *Les Accommodements raisonnables* と呼ばれる「文化的寛容性」をめぐる議論で、この論争はケベック社会に大きな波紋を呼んだ。これは世界的な動きとも連動し、主に宗教を基盤に自らのアイデンティティを強く主張する新たな傾向をもつ移民たちの動きによって、多元社会ケベックが新たな課題に直面していることを印象づけるものであった。その一方で、2007年は101号法と呼ばれる仏語憲章施行30周年にあたり、この憲章が社会に及ぼした影響について大がかりな決算が行われた。その結果、この憲章がケベック社会に浸透するにつれて特に若い世代に大きな影響を与え、新しいコスモポリタンな感性を備えた「101号法の子供たち」と呼ばれるジェネレーションが育っていることが明らかになった。

一方、文学の領域では、そうした社会的動向に呼応するように、新しい世代の文学が芽吹いていると言えよう。新世代文学を担う若い作家たちは、これまでケベックで創作活動を行ってきた作家たちが、少なからずこだわりを持ち続けたナショナリズムやアイデンティティの問題から解放され、多様な人々との繋がりをこれまでになく自然な形で受け止め、新たな関係を築いていこうとする開かれた気風に富んでいる。彼らはケベックで生まれ育ち、この地への移民ではないにもかかわらず、「移住」や「移民性」をテーマにした作品や、これまでは近くて遠い「隣人」にすぎなかった移民との交流をテーマにした作品を描き、そこからは新しいコスモポリタニズムの息吹が伝わってくる。こうした傾向は、先に述べた仏語憲章、いわゆる101号法が定着し、仏系ケベック社会の雑種化が推し進められた結果とも考えられるが、その動きと並行して、ケベックで1980年代から、仏語で表現活動を行う移民作家を中心に推進された、新しい多民族の共存と文化変容の理念であるトランスカルチュラリズムの浸透が大きな要因として考えられるであろう。とりわけ、この動向を反映した「移動文学 *l'écriture migrante*」と呼ばれる一連の移民作家たちの作品が、ケベックの中学や高校の教科書に取り上げられ、トランスカルチュラリズムと「移動文学」が教育を通して若い世代に広く浸透したことは特筆に値するだろう。トランスカルチュラリズムが浸透した結果生まれたこうした新しい動向を、ある批評家は「トランスミグランス」と呼んでいる。

この論考では、二十一世紀に入り変貌著しい多元社会ケベックの社会的な状況を概観し、この社会が直面している問題を探りながら、一方で、芽吹いてきた新世代文学に注目しそこにぎざしている新しいコスモポリタニズムの可能性について考察したい。

I 岐路に立つ多元社会ケベック

1 「文化的寛容性」をめぐる議論とケベック

2006年11月、ある事件をきっかけに、ケベックにおいて、いわゆる *Les Accommodements raisonnables* と呼ばれる議論が巻き起こる¹⁾。それは、モントリオールのユダヤ系が多く居住する地区にあるYMCAで、近隣に住むユダヤ人からの要望に応え、窓に擦りガラスが取り付けられたことに端を発する。この地区に住むユダヤ人の多くは、ハシディズム（敬虔主義）と言われるユダヤ教徒の中でも最も保守的な一派で、その多くは外部との積極的な交わりを避け、宗教に基づいた独特の生活スタイルを貫いている。彼らは、YMCAの窓から見える肌を露出したウェアの会員たちの姿が、この地区のユダヤ系の子供たちを刺激して悪影響を与えるのではないかと恐れ、YMCAに対して窓を擦りガラスに替えるよう求めたのであった。YMCA側はさっそくこの要請に応えるが、今度は、YMCAの会員たちが閉塞感をもたらすこの措置に反発したのであった。

当初はそれほど大きな問題にも思われなかったこの一件は、その後、ケベック社会を挙げての一大論争へと発展する。この一件に引き続いて、『ジュルナル・デュ・モンレアル』は、モントリオール郊外の保健所（CLSC）で、イスラム教徒の女性たちを不快にさせないために、出産準備のための指導を行う教室に男性を入室させない措置をとった事例などを報告した。特定の宗教の信者に配慮して、それまでの生活習慣や文化的慣例を大幅に見直すこれら一連の出来事は、メディアを通じて大きな波紋を呼んだ。そして、この問題は、ケベック民主活動党党首、マリオ・デュモンが、憲法に定められている、宗教を含めた個人の自由を尊重するあまり、そうした文化的妥協を探る一連の措置は行き過ぎではないかと発言し、政治の舞台にまでその波紋が広がっていった。

この他にもメディアは、公共の場において、信教の自由に則り、様々な宗教的な習慣に依拠してアイデンティティを主張しようとするマイノリティの例を列举し、マリオ・デュモンは、このような傾向によって、いわゆるカトリックを主流とするキリスト教文化に基づいた、「マジョリティ」であるケベコワのケベック的価値や伝統がないがしろにされかねないと訴えた。この議論への関心は高まり、論争はますますエスカレートした。ケベックの首相である自由党党首ジャン・シャレーは、マリオ・デュモンのいささか挑発的ともとれる言動に、今日のケベック社会においては、様々な文化的、宗教的差異を認め合おうとする姿勢こそが肝要だと苦言を呈した。その一方、州をあげての議論の高まりと重要性を鑑み、そのなかで行き詰まりつつあった論争に一定の決着をもたらすため、シャレーは、2007年2月に、ケベックきっての思想家で知識人であるチャールズ・テイラーとやはり著名な知識人で歴史家であるジェラルド・ブシャルの二人を委員長に任命し、*Les Accommodements raisonnables* の指針を検討する委員会を立ち上げることを決定した。

ここで用いられている *Les Accommodements raisonnables* という言葉は、直訳すれば「良識ある妥当性」とも言えるが、そもそも法律用語であり、判例において用いられ、次のような限定された意味を持っていた。それは雇用主や会社に対し、雇用した労働者が、その人種や民族的な出自、宗教、性別、年齢等の様々な要因によって差別的な扱いを受けたり不利益を被らないよう、規則や規定において十分配慮するよう求めたものだった。しかし、今日のケベックでの議論において、この言葉はもっと広い文脈で用いられ、様々な宗教や文化に基づく要請に対する調整や妥協の措置を指していると言えよう。そしてこの議論の要諦は、「マジョリティ」である仏系ケベコワの文化に基づく共同体において、一体どこまでマイノリティの、あるいは個々人の自由と権利を尊重し、その差異を受け入れられるかということ問うことにあった。従って、テイラー・ブシャルの委員会に託された任務とは、言わば、今日のケベック社会での「文化的寛容性」の指標を打ちたてようとするものに他ならなかったであろう。

メディアにおいて、マイノリティの宗教に基づく様々な要請やアイデンティティの主張が報告され始め、ケベックにおいてこの「文化的寛容性」の議論が活発になった背景には、昨今の世界的な趨勢が影響していることは明らかであろう。2001年のアメリカ合衆国における9.11事件を境にイスラム対西洋の構図が普遍化され、イスラム世界を脅威と捉える風潮が定着した。またフランスにおいては、ライシテ(Laïcité)、すなわち徹底した世俗主義を標榜する社会において、増え続ける移民とその子供たちの社会への統合がフランス社会を悩まし、イスラム系の女生徒のスカーフ問題に代表されるように、その移民たちの宗教的主張が文化摩擦として顕在化している。さらに2005年末から頻発した移民二世を中心とする暴動によって、一切の民族的、宗教的属性をカッコにくくり抽象的な個人として移民たちを扱おうとする普遍・平等主義の欺瞞と横行する差別が表面化し、そのことによってフランス社会が抱える亀裂の深さをまざまざと見せつけた²⁾。ケベックにおいても、二十一世紀を迎える頃から、例えば北アフリカからのイスラム系の人々など、これまでも増して多様な移民が入り込み、1980年代以降のトランスカルチュラリズムの動きのなかで進展したコスモポリタンな共存の模索と均衡は大きく揺らぎ始めた。従って、ケベックにおけるこの *Les Accommodements raisonnables*、いわゆる「文化的寛容性」をめぐる議論は、世界の動きと連動した時代の必然的な流れの中で生じてきたものと考えられる。

しかし、この議論においてしばしば指摘されるように、メディアが取り上げた一連の宗教的要請やアイデンティティの主張は、ごく限られたマイノリティのグループ、すなわちユダヤ教のなかでも極めて保守的なハシディズムの信者や、イスラム原理主義の一派からのものであり、ケベックに居住する大部分の移民やマイノリティの人々は、それぞれに様々な宗教を信じながら、それほど強い要請や主張を繰り広げることなどなかったし、文化摩擦に発展することもないのであった。従って、この議論が大きな波紋を広げたのは、多分に、一部のマイノリティの動きに注目したメディアのセンセーショナルな取り上げ方にも原因があったと考えられる³⁾。

さらに注目すべきこととして、*Les Accommodements raisonnables* の議論の発端を遡れば、この「文化的寛容性」についての議論の先駆けとなった懸案として、2006年3月にカナダの最高裁判所が下した次の判決が考えられるであろう。それは、カナダのある学校で、イスラム教の流れを汲むシーク教徒の男子生徒が携帯していたキルパンと呼ばれるナイフの所持についての事例である。この生徒によるキルパンの所持は、当初、学校側が危険物であるナイフの所持は通常学校生活において禁止されている以上、宗教的な慣習であっても許容できないと主張し、下級裁判所ではそれが認められたのであった。これに対して生徒側は異議を唱え、裁定を求められた最高裁判所は下級裁判所の決定を覆し、「民主主義に基づくカナダ社会においては、個人の信教の自由と宗教的な慣習に対して寛容であるべき」⁴⁾であり、「学校は生徒たちに、個々の宗教の慣習について理解を促すべきである」⁵⁾と結論づけた。この決定に対し、あるジャーナリストは「学校生活において、これまで以上に宗教的慣習の多様性を認めた画期的な判決であり、多文化主義の勝利と言えよう」⁶⁾と結論づけた。その一方で、当時のケベックの世論調査が明らかにするところによれば、学校などの公共の場での宗教色の顕示に対して6割近くが反対しており、この結果を示しながら、あるジャーナリストは「ケベック社会の多数の世論の反対にもかかわらず、最高裁判所は多文化主義の守護神と化し、キルパンの所持を認めた」⁷⁾と揶揄した。

すなわちこの論争が象徴的に示しているように、ケベックにおける *Les Accommodements raisonnables* の議論の背景には、カナダの多文化主義が依って立つ、個人の権利と自由を優先するリベラリズムの流れと、フランスの共和国理念とライシテ(世俗主義)に代表される、公共性の尊重とその利益を配慮する流れとがぶつかり合っていると言えるだろう。グローバル化がすすむ世界的な潮流のなかで、公共の場における宗教や文化の意味が抜本的に問い直されている今日、ケベックの *Les Accommodements raisonnables* の議論は、先に述べた二つの相反する考え方を視野に入れ、その双方の

間で揺れ動きながら、①公共の場で宗教はどのように位置づけられるか、②公共の価値を損なうことなく、宗教を含めたマイノリティの権利はどのように守られるべきか、そして、③個人の権利と自由、社会の安定と利益とが対立するのではなく均衡するためには、どこに境界を見い出せばよいのか、といった重要な問題を問いかけ、そのための指標を打ちたてようとする興味深い試みであると言えるだろう。

2 仏語憲章30年後の決算と「101号法の子供たち」

一方2007年は、ケベックで1977年に仏語憲章が施行されてから30年目にあたり、その大がかりな決算が行われた。よく知られているように、いわゆる「101号法」⁸⁾と呼ばれるこの法律は強力なフランス語化政策を推し進めることになり、ケベック社会に大きな変革をもたらした。フランス語をケベック州における唯一の公用語と定め、それまでは少数派でありながら支配者階級にあった英語系住民に掌握されていた社会を、ビジネスや公共生活のあらゆる側面において広くフランス語使用を一般化し、仏系住民のアイデンティティが強く打ち出される社会へと改革することを目指した。その重要な柱の一つは、それまでほとんど英語系のコミュニティに取り込まれてしまっていた移民たちをフランス系社会に組み込もうとすることであり、両親のいずれもが英語を話さない移民の子弟は、原則としてフランス語の学校で教育を受けることを義務付けられた。仏語憲章施行30年後の決算は、この憲章が定着したケベック社会の、その様々な変貌ぶりを浮き彫りにしたが、とりわけ注目されるのは、「101号法の子供たち」と呼ばれる新しい感性を備えたジェネレーションの若者が育っていることにあるだろう。

ケベックで広く流通するフランス語の雑誌 *L'Actualité* は、2007年9月号の誌上で、*Vivre en français en Amérique, Yes sir!* と題された特集を組み、仏語憲章施行30年後のケベックの現状をさまざまな側面から分析している⁹⁾。その中でも述べられているように、仏語憲章は施行された当初、フランス語を強制するラシスト的な法律だと強い批判と反発を浴びたが、施行され定着してから30年が経ち、この憲章がもたらしたものは、仏系社会ケベックの純化ではなく、むしろ仏系社会の雑種化にあったことを指摘している。それは、州の人口の約半数が集中する都市モントリオールでのみ顕著な事実だが、以前は、*de souche française* と呼ばれる土着のフランス系の子供のみが通っていたフランス語の学校は、仏語憲章の施行後、肌の色や目の色が違う様々な出自の子供たちが集う雑種的な空間へと変貌した。そしてそうした多民族のつづきのなかで、フランス語によって教育を受けた世代の子供たちは、いわゆる「101号法の子供たち」、*Les enfants de la loi 101*、と呼ばれ、それまでの世代とは大きく異なり、文化的な差異に対して極めて寛容なコスモポリタンな感性を備えていることが明らかになった。

L'Actualité の特集記事において、30代前半の、ベトナム系やハイチ系、サルバドル出身など様々な出自の「101号法の子供たち」は、インタビューに答え、彼らの中に、折衷的で、雑種的なアイデンティティに対してのためらいや苦悩が全くないと言えうそになろうが、彼らはそうした現実をいたって前向きに、肯定的にとらえていると述べている。そして、「自分たちの存在によって、ケベコワの新たなアイデンティティが創り出されようとしている」¹⁰⁾と自覚している。さらに例えば、ベトナム出身のカイ・ダオは「自分はモントリオールに住むベトナム人だとも言えるし、ベトナム出身のモンレアレ(モントリオール人)だとも言える」¹¹⁾と述べている。ここから垣間見える彼らの共通点とは、居住する都市であるモントリオールへの強い愛着とコスモポリタンな市民感覚であろう。また彼らの多くは、ライシテ(世俗主義)を支持し、仏語のみならず、英語や出自の母語を含めた多言語使用を常としている。

さらに注目すべきことは、仏語憲章のもとで培われた新しいジェネレーションのコスモポリタンな感性は、移民の子弟に限ったことではなく、この地で生まれたケベコワの子供たちのなかにも大きく育まれている事実である。2007年9月1日のフランス語系の新聞『ラ・プレス』のコラムには、この世代に

Mar. 2009

ケベックにおける新世代文学とトランスミグランス

属するフランス系のケベコワで、弁護士のメラニー・ジョリーの *Les Accommodements raisonnables* についての見解が取り上げられている。「寛容なる若者世代」と題されたその記事のなかで、彼女は、ケベックの30歳以下の若い世代は、それ以前の世代とは全く異なった社会のなかで成長したと述べている。そして若い世代の意見にもっと耳を傾ければ、この議論についての様相は大きく変わってくるはずだと主張する。

・・・仏語憲章は単なる立法上のことよりはるかに大きな意味を持ったと思われる。それは、言わば、私たちの世代の考え方や行動を決定づけた。私は、ラヴァル（モンリオールの郊外都市）やペイルート（レバノン）、ポール・オ・プリンス（ハイチ）の現実が入り混じった教育システムのなかで育った。私は子供の頃から、ごく日常的に、多様な人々が共生するケベック社会を目の当たりにしながら育った。手帳を見れば、世界のいたるところからやって来た友人の名前が記されている。そして彼らは、紛れもなく私と同様ケベコワなのだ。

今、世間を賑わしている *Les Accommodements raisonnables* の議論のなかで、都市部すなわちモンリオールと郊外との亀裂、あるいは学歴格差等、ケベック社会の分裂の影響が語られるけれど、私が絶えず感じるのは、もっと見過ごせない現実とはこの世代間の分裂ではないか、ということだ。・・・¹²⁾

そして彼女が最も危惧することとは、「多様な移民たちとの共生がすすむケベックの状況に対して、疑念と不寛容がはびこること」¹³⁾ であると言う。このように、若いケベコワの見解を読めば、新世代の若者のなかに新しい感性が脈打っていることが明らかになってくる。

3 地域と世代：広がる差異と新しい寛容性の可能性

先の指摘にもあったが、*Les Accommodements raisonnables* の議論の背景の一つともなり、ケベックでの文化摩擦の要因の一つとなっているのは、都市部であるモンリオールと郊外、および地方との差異の広がりである。様々な出自の移民が入り込む多民族化は、ケベック州においては、人口の半数が集まる都市部のモンリオールに集中している。それ以外の地方では、約80%近くの住民がフランス系のケベコワであり、民族構成は著しい違いを見せている。その上、モンリオールでの多民族化が加速するに従って、雑種化が進む都心を離れ、郊外に居住するフランス系住民や特定の民族グループが増加して、郊外は民族構成において比較的均質な地域となり、都心と郊外との差異が広がる傾向を見せている。このように著しい差異が生じるなかで、同じ社会状況を共有できず、多民族化と共存への理解も追いつかないことが、「文化的寛容性」の議論において寛容性を阻んでいる要因の一つと考える見方もある¹⁴⁾。

一方、すでに検証してきたように、「101号法の子供たち」の世代とそれ以前の世代とでは、多様化する移民と多民族化する社会への適応力と寛容性において大きな違いを見せており、今日のケベック社会で、世代間の差異が大きな要因としてクローズアップされつつあると言えるだろう。

このようにケベック社会の多民族化とコスモポリタニズムは、地域と世代の差異の広がりによって、常に分裂の危険を孕みながら進行している。しかし、先の新しいジェネレーションによる開かれた感性が示しているように、ケベック社会を導く新しい寛容性の可能性が確かに萌していると言えるだろう。

Ⅱ 新世代文学とトランスミグランス

1 トランスカルチュラリズムからトランスミグランスへ

ケベック文学においても、こうした社会の変化は如実に映し出されている。ケベック社会において多民族化が意識され始めたのは、1980年代にさかのぼる。英系カナダが標榜する多文化主義（マルチカルチュラリズム）とは一線を画し、ケベックにおいて模索された多民族の共存のあり方は、マイノリティの側から発祥し、文化変容そのものに注目しようとするトランスカルチュラリズムであった。それは、文化の三角構造とも呼ばれるモンリオールの独自性を背景に、活力を失わないマイノリティである移民たちと、マジョリティでありながら脅かされた立場にあったケベコワとの連帯を核として伸展していった。このトランスカルチュラルな状況を写しとり、新たなアイデンティティを求めようとしたのは、フランス語で活発な創作活動を繰り広げた移民作家たちであった。イタリア系やハイチ系、ユダヤ系やアジア系など、様々な出自の移民作家たちの文学は、あらゆる既存の枠組みを解体し開かれた想像力の地平を切り拓こうとする、移民文学ならぬ「移動文学」*l'écriture migrante* と呼ばれてケベック文学に一時代を画した¹⁵⁾。

注目すべきことは、90年代には、この「移動文学」の作家たちの作品がケベックの教育制度のなかに早々と組み込まれ、若い世代に大きな影響を与えたと推測されることである。すなわち、中学や高校の文学の教科書に「移動文学」は一つのジャンルとして紹介され、中国系のイン・チェンやブラジル出身のセルジオ・コキス、ハイチ系のエミール・オリヴィエなどのテキストが教材として掲載されたのである¹⁶⁾。

おそらくこの教育を通してのトランスカルチュラリズムや「移動文学」の浸透は、仏語憲章施行後に育った世代の感性に、少なからぬ影響を与えたと考えられる¹⁷⁾。その一つの証左は、二十一世紀に入り、移民の子弟ではないケベコワの若い世代のなかから、自分自身は移民ではないにもかかわらず、「移住」や「移民性」をテーマにした作品や、それまでは近くて遠い「隣人」に過ぎなかった移民たちとの交流や交感をテーマに作品を描く作家が現れたことである¹⁸⁾。

それまでケベックの多民族化やコスモポリタンな状況を描く文学とは、あくまで移民の側からの多様性の表出や新しいアイデンティティの表明が主流であったが、ケベック社会にトランスカルチュラリズムが浸透した結果、新世代のケベコワを中心に、積極的に「移民性」を受け入れ、移民に対して開かれた柔軟な感性を顕す新たなコスモポリタニズムが生じてきたと考えられるのである。この動向を、ケベックの文学批評家であるジル・デュブイは「トランスミグランス」と呼んでいる¹⁹⁾。

確かにトランスカルチュラリズムと移動文学は、1980年のレファレンダムの後、急速に多元化し、ポストモダニズムが爛熟したケベック社会の文化的雑種性を象徴する動きとして登場した。しかしデュブイは、ケベック社会と文学において、トランスカルチュラリズムが標榜する、アイデンティティの変容を促す相互作用的で文化混淆的なダイナミズムが顕著になるのは、もっと遅く90年代の後半から二十一世紀にかけてのことであったと主張する。すなわち、雑誌 *Vice Versa* によって広く流通することになったトランスカルチュラリズムの概念は、当初、極めて前衛的なものであり、その時代の状況を映しとるというよりも、来るべき状況を先取りしていたと言えるであろう。その尖鋭で理論的なトランスカルチュラリズムが徐々に浸透していった結果、マジョリティであるケベコワとマイノリティである移民との間に、実際に自らのアイデンティティの変容と他なるものとの相互交流をとまなう意識の変化が生じたと考えられる。ケベック文学のテーマと文体においてもそれは顕在化して、90年代後半から二十一世紀にかけて、例えば、レバノン出身の移民作家アブラ・ファルードに見られるように、自らの変容の過程を見つめながら、ケベシテ（ケベック性）を積極的に取り込もうとした作品や、一方、すでに述べたよ

うに、若いケベコワの新世代文学を中心に、移民性を強く意識した作品や、他なる隣人に向かって開かれようとした作品が生まれてきたのである。すなわち、どちらかといえば先行した理論であった「トランスカルチュラリズム」に対して、デュブイのいう「トランスミグランス」とは、トランスカルチュラリズムの概念が浸透した結果、現実が理論に追いつき、実際に起きた相互変容的な動向とその意識の変化をそれまでより明確に反映した作家や作品を指し示していると言えるだろう²⁰⁾。

2 『ハダッサ』にみるユダヤ性との交感

新世代文学に表れたトランスミグランスを最も雄弁に例示する作品の一つとして、ミリアム・ボードアン『ハダッサ』²¹⁾を挙げることができるだろう。『ハダッサ』の舞台となったのは、Les Accommodements raisonnables の議論の発端となった YMCA での事件が起きたモンリオールのユダヤ人地区である。

『ハダッサ』は、モンリオールのユダヤ系の人々が数多く居住するウートウルマンの一角にある、女子生徒ばかりが集う小学校に嘱託講師として赴任したアリスと、ユダヤ人の少女たちとの交流を描いた物語である。フランス語を教えるために赴任したケベコワの女性教師は、ほどなくこの地区一帯や学校のなかに、入り込めないユダヤの世界が広がっていることを思い知らされる。女性教師の名前がアリス (Alice) と名づけられていることは、ラビルスに迷い込んだ『不思議の国のアリス』を髣髴とさせ極めて象徴的である。実際、他の地区から地理的にそれほど離れていないにもかかわらず、一步この地区に入り込むと、外の世界とは隔絶したかのように、ここでは日常生活すべてがユダヤ教の戒律のなかで進行している。イディッシュ語を操るユダヤ系の教師たちと他の教師との間にも、ユダヤ教の子供たちとアリスとの間にも見えない壁が存在しており、それに阻まれ、もどかしい思いをしながら、アリスは子供たちと向き合うことになる。

しかし、ハダッサという名の好奇心に満ちた少女との出会いが、アリスを神秘に満ちたユダヤの世界に目覚めるきっかけを作ってくれる。無邪気な少女は、まるで未知の世界の水先案内人のように、アリスにユダヤの教えについて説きその深みに導いてくれるのだった。

トーラと呼ばれるユダヤ人にとっての聖典がいかに大切か、ユダヤの人々の生活はすべて、ユダヤ暦に定められた祭りや行事に則って進行し、ロシュ・ハシヤナ (新年)、ヨム・キプール (贖罪の祭り)、スコット (仮庵祭)、ペサハ (過越しの祭り)、そしてシャブオット (収穫祭) など、小さな少女の日常はすでにユダヤの戒律のなかにしっかりと組み込まれているのだった。アリスは、ユダヤ人の人生と生活全般を律する戒律を驚きをもって受けとめる。

13歳になったとき、少年が大人になる通過儀礼が行われ、12歳になると少女が大人になる通過儀礼が行われる。ユダヤ人の結婚はすべて、shadchen と呼ばれる仲介人によって取り仕切られる。ハダッサが語る、ユダヤ人の男女の出会いと調整された結婚のプロセスは次のように運んだ。

… shadchen は手帳を持っていて、そこに結婚前の若い男女の情報がすべて書き込まれているの。私たちの名前もよ。そして、その中からベスト・マッチの相手を探し出すの。それから両親たちにそのことを伝えるのよ。もし両親たちがその決定をいいと言え、shadchen はユダヤ教区の長であるラビ (rabbin) に報告するの。その決定をラビが了承すると、ラビは両家を出会わせるためにホテルを予約するのよ。ホテルで両家が出会ったとき、娘が相手の男性に最初に尋ねることは、彼がちゃんとユダヤの戒律 (Torah) を尊重しているかということと、彼女が身につけるとしたら、彼はどんな色のストッキングを好むかということなのよ。出会って、もしその男女が結婚を決意したら、両親たちは親戚中にそのことを伝えるの。そして婚礼の祭 (Tena'im) が準備されるの²²⁾。

学校で子供たちが閲覧できる本は、厳しい検閲を受けたものばかりだった。妊娠や出産、動物の交尾のイメージにいたるまで、性にまつわる話や絵はすべてタブー視され、結婚適齢期を迎えるまで少女たちからいっさい遠ざけられていた。授業で取り上げる教材も、善男善女が登場し必ずハッピーエンドで終わる物語だけが生徒たちに受け入れられた。

ある日、アリスはふとした折に、「自由」の意味を生徒たちに問うてみた。すると戻ってきたのは意外な答えだった。

——「自由」という語は、どんなことを意味すると思う？ ハダッサ、あなたは思う？

——「自由」、それって彫像のことよね。先生

その答えに生徒たちは皆、ご満悦のようだった。私もその答えを楽しんだ。

——そうね、確かにニューヨークに自由の女神があるわね。

・・・生徒たちは口ぐちに相槌を打った。

——でもね、ここではそうじゃなくって、「自由」という言葉の意味を聞いているの。

子供たちは黙り込んでしまった。私はその場で、自由とは何かを定義してみた。

——自由とは、囚われることがなく、誰にも遠慮する必要もなく、好きなときに好きなことが出来ること...、かしら。

すると、ブルーミィがさっと私を遮った。

——いいえ！ 先生が言っているのは、単に甘やかされていることを言うのよ²³⁾。

このように、ユダヤの少女たちにとって、「自由」という概念は容易には受け入れられないもので、むしろ戸惑いを呼び起こすものですらあった。互いの価値観に大きな違いを感じながらも、非ユダヤ人の教師は、ユダヤの少女たちの感性や習慣に出来る限り寄り添いながら彼女らと向いあった。一方、生徒たちも、非ユダヤ人の教師に、警戒心とともに、好奇心や憧れを抱いて近づいてきた。

無邪気な少女たちの語りは、アリスから徐々に偏見を取り払ってくれる。とりわけ、ハダッサは無鉄砲さと内気さの両方を合わせ持ち、アリスはその不思議な危うさに引き付けられるのだった。ハダッサは、ユダヤ人の伝統について、例えば、人々に欠乏していた「油」が、探し始めて8日目にもたらされた奇跡を祝うハヌーカ（Hanoukka）の祝祭や、昔、エステル（Ester）の機転によってユダヤ人が救われた逸話を祝うプーリム（Purim）の祝日について、その華やかで厳かな様子を誇らしげに語って聞かせた。ハダッサや少女たちとの心の交流を通し、次第にアリスはユダヤの世界の奥深さに目覚めていく。

しかし、ユダヤの民の悲劇は小さな少女たちの胸にも刻み込まれており、アリスはそこにどうしても立ち入れない何かを感じるのだった。ある日アリスは、子供たちに家族について作文を書くよう宿題を出す。生徒たちの作文から浮かび上がってきたものは、苛酷な先祖たちの運命に他ならなかった。ハダッサの祖母は、収容所で幼い娘を失うが自らは生き延びた。船で命からがら米国へと渡り、二度目の結婚をして、今のハダッサの母が生まれたのだという。小さな子供たちの心にも、こうしたユダヤの民の栄光と悲劇はしっかりと受け継がれていく。ユダヤ人の教師たちによって、旧約聖書にある出エジプト記、囚われの身から解放され、砂漠を渡った民の歴史とメシア思想が教え込まれる。そして幼い子供たちの意識のなかにも、ユダヤ人のみが救われるという、ユダヤの選民思想が植えつけられていくのだった。

アリスの任期も残りわずかとなったある日、思春期を前に、揺れ動く心を抱え反抗的な態度を示すハダッサは、アリスの前からふっと姿を消してしまう。しかし、父兄参観日にやって来たハダッサの母親

は、彼女が家でどれだけ「フランス語の先生」のことを、愛着を込めて話していたかをアリスに伝えるのだった。こうして、ユダヤ人学校での経験と出会いはアリスの心に深い痕跡と余韻を残すのだった。

主人公は驚きと戸惑いを伴いながらも、次第にユダヤの世界に深く入り込んでいく。この小説では、価値判断や見下ろすような視線はみじんもなく、あくまで淡々とした描写によって、少女が語るユダヤの世界が浮き彫りにされている。そしてそのことによってこそ、この作品が相互交流的な、間文化的な「対話」になり得ていると言えるだろう。実際、この作品の、他者を尊重しようとする姿勢とその間文化的で、対話的なアプローチは、「閉じられた世界への旅」²⁴⁾であり、「ユダヤの未知の世界とその秘密に、繊細さと尊敬を忘れず分け入ろうとした」²⁵⁾として、批評家や読者から高い評価を得た²⁶⁾。

一方、この小説では、もう一つの軸として、ポーランドからの移民である青年のジャンと、ユダヤ人の人妻デボラの禁断の恋とその複雑な心の揺れも丹念に描かれ、乗り越えがたく異なった世界との交流が象徴的に描かれる。

『ハダッサ』の文体は、あくまで小さな少女の目線から描かれ、起伏に富んだ繊細で微妙な心の襞が描きこまれている。この作品は、ユダヤ系というモンリオールに古くから居住しながら、決して外の世界に開かれてはいなかった移民の世界に、小さな少女の視点という特権的な角度から入り込み、ケベコワの側から移民の世界との交流を実現して、トランスミグランスな感性を表現しようとした注目すべき作品だといえるだろう。

『ハダッサ』が出版されたのは、2006年の上半期であり、その年の末には、「文化的寛容性」をめぐる、Les Accommodements raisonnables の議論が巻き起こる。まるで、その後、ケベック社会を席卷する問題意識を先取りするかのように、この物語において、作者は他者の宗教と伝統に入り込むことの難しさとともに、それに向き合うための繊細さや、優しさ、そして英知のあり方を指し示し、他者と「対話」することの可能性を描きだそうとしている。

結語

ケベック社会は、1980年代から興隆したトランスカルチュラリズムによって、モンリオールを中心に独自の多民族の共存のあり方を模索した。そこで打ち建てられたコスモポリタニズムは、二十一世紀に入り新たな状況に直面し大きな岐路にさしかかっているといえるだろう。とりわけ、顕在化する地域間や世代間の格差はこの社会が内包する分裂の危機を増幅させている。しかし、新世代文学が指し示しているように、新しい世代に兆す開かれた寛容性に満ちた感性は、確かに、来るべき新しいコスモポリタニズムの可能性を示唆しているといえるだろう。

〔付 記〕

本稿は、独立行政法人日本学術振興会科学研究補助金基盤研究 (c) (課題番号: 17520213) の研究成果の一部である。

注

- 1) この論争についての経緯や詳細なデータについては Michel Venne et Miriam Fahmy, *L'Annuaire du Québec 2008*, Fides, 2007, « Culture, Identité et Accommodements raisonnables », および Yolande Geadah, *Accommodements raisonnables : droit à la différence et non différence des droits*, VLB, 2007, を参照した。
- 2) 例えば、社会学者の宮島喬氏はその著書のなかで、フランスの社会統合政策が現在危機に瀕していると指摘している。「[フランス的統合とは何か] が問われるようになったが、…… [ヴィジブル・マイノリティ] の時代に、

フランス的平等の理念は、成員の属性上の差異をどのように扱うのだろうか。いっさいの属性をカッコにくくり普遍的・抽象的個人として扱うとは、ヴィジブル・マイノリティにとってはいったい何を意味するか。それは、彼らが肌の色や、宗教や、日常生活を理由に差別されているという動かしがたい事実を素通りし、無視することではないのか。……もっと現実在即した「平等」の捉え直しが必要となる。……」宮島喬『移民社会フランスの危機』岩波書店、2006年、前書き12-13頁。

- 3) この点については、先に挙げた *L'Annuaire du Québec 2008*, Fides, 2007, « Culture, Identité et Accommodements raisonnables », および Yolande Geadah, の著書においても指摘されている。
- 4) *L'Annuaire du Québec 2008*, Fides, 2007, « Culture, Identité et Accommodements raisonnables », p.126-127. から引用による。
- 5) *Ibid.*
- 6) *Ibid.* この発言を行ったのは *Le Devoir* の Brian Myle 記者である。
- 7) *Ibid.* これは *Le Devoir* の紙上で述べられた社会学者の Mathieu Bock-Côté 氏の見解である。
- 8) ここで「101号法」と訳している Loi 101 とは正確に言えば法案の番号であり、法案段階での呼び名がそのまま呼称として定着したものである。101号法案は、正式な法律となり「仏語憲章」となった。しかしケベックではこの「仏語憲章」のことを愛着を込めて loi 101 と呼び習わしている。日本語の訳として、「101号法」と訳すべきか、「101号法案」と訳すべきかは判断が難しいところであるが、すでに施行されている法律なのでここでは呼称として「101号法」と訳しておく。
- 9) *L'Actualité*, Vol.32, No14, 2007, Septembre.
- 10) *Ibid.*, « Les enfants de la loi 101 », p.36.
- 11) *Ibid.*, p.38.
- 12) *La Presse*, Samedi 1er septembre 2007, Mélanie Joly, « Des jeunes accommodants »
- 13) *Ibid.*
- 14) 例 え ば, Lacroix, Jean-Michel et Linteau, Paul-André, *Vers la construction d'une citoyenneté canadienne*, Paris, Presses Sorbonne, 2007, Linteau, Paul-André, « Les transformations de la société multiculturelle au Québec(1945-2000) » において、モンリオールの都市部の多民族化によって、それ以外のケベックの地域との地理的、地政学的差異が際立ち始めていることが分析されている。
- 15) この動向については、拙著『トランスカルチュラルイズムと移動文学—多元社会ケベックの移民と文学』（彩流社、2006年）の第二部8章で詳しく論じている。
- 16) *Anthologie de la littérature québécoise* (CEC) 1996, *Littérature québécoise* (HMH) 1996など、多くの教科書やアンソロジーに l'écriture migrante の章がもうけられて何人かの作家が紹介されている。
- 17) Monique Lebrun et Luc Collès, *La littérature migrante dans l'espace francophone -Belgique- France-Québec-Suisse-*, E.M.E., 2007, に収められたいくつかの論考で、各国の教育の現場で取り上げられる La littérature migrante のテキストとその影響についての分析がなされている。
- 18) 例えば、2005年に出版されて若い世代を中心に熱狂的な支持と反響を得た作品に、若い世代の作家であるニコル・ディックナーの『ニコルスキー』がある。この作品では「移住性」のテーマが独特のユーモアに溢れた軽妙な語り口でつづられており、これまでケベック文学において根強かったルーツやアイデンティティへのこだわりが無効化が感じられる。Dickner, Nicolas, *Nikolski, Québec*, Éditions Alto, 2005.
- 19) Dupuis, Gilles, « Les écritures transmigrantes. Les exemples d'Abla Farhoud et de Guy Parent », Chartier, Daniel et d'autres, *Littérature, Immigration et Imaginaire au Québec et en Amérique du Nord*, L'Harmattan, p.259-273.
- 20) トランスミグランスについては、拙論「二つの「幸福」なる文学にみる多元社会ケベックの変貌—「二つの孤独」からトランスミグランスへ」（『阪南論集・人文自然科学編』43巻2号、阪南大学学会、2008年3月）において

Mar. 2009

ケベックにおける新世代文学とトランスミグランス

すでに考察を行っている。

21) Myriam Beaudoin, *Hadassa*, Leméac, 2006.

22) *Ibid.*, p.38-39.

23) *Ibid.*, p.53-54.

24) *La Presse*, Marie Claude Fortin, <Les Petites filles modèles>, le 23 Sep, 2006.

25) *Ici*, le 25 Aug. 2006, 書評

26) また例えば, *Le Devoir*, le 2-3 sep. 2006, の書評欄において, Danielle Laurin は, 「この小説で, 主人公はどのようにして他者の文化や宗教に近づくべきか? 傷つけず, 判断せず, 尊敬を忘れず, 愛情をもって他者に近づくことは可能か? と誠実に問いかけている。」と述べている。

(2008年11月28日掲載決定)